

# 渡辺隆次 孢子紋の世界展

『森の天界図像 わがイコン 孢子紋』  
渡辺隆次まきのこ画文集 刊行記念

2021  
527(木)

711(日)

9:00-21:00  
〈観覧無料・月曜休館〉

砂丘館

日本銀行前町及び長役社

会場:砂丘館ギャラリー(蔵)ほか各室  
主催:砂丘館  
共催:渡辺隆次画文集刊行委員会  
協力:フィリア美術館

〈刊行記念展は下記でも開催を予定しています〉

9|12(日)–10|24(日)

フィリア美術館

山梨県北杜市小淵沢町上笹尾3476-76

11|4(木)–11|21(日)

コミュニケーションギャラリーふげん社

東京都目黒区下目黒5丁目3-12

「大寒・夜の庭—孢子紋(不明種)」2012年1-3月

季刊誌「健康」巻頭エッセイのための挿画 / 2012年春号 フィリア美術館蔵

# 渡辺隆次の胞子紋画

大倉宏

胞子紋のフォルムにはなぜか既視感がある。遙か昔から知っていた、そんな思  
いがある。それは、まばゆい光彩、放つては万物をやさしく包み込んでくれる。  
そして、人の世の重圧に救いの兆しが芽生えるようにも感じられた。

(渡辺隆次「わがアイコン 胞子紋」より)

砂丘館の庭にもよくきのこが出る。動物・植物・菌類は命の循環世界の三本柱だと私に教えてくれたのは渡辺隆次著『きのこの絵本』(ちくま文庫 1990年)であった。きのこを  
含む菌類という、有機物を無機物に変える(戻す)存在がいなければ、地球は腐敗物だらけになつてしまふのだという。砂丘館でちょうど15年前(2006年)に渡辺の「きのこのスケッチ展」を開催したが、渡辺にはきのこを描いた絵ばかりでなく、きのこを描いた絵があり、それが「胞子紋画」と呼ぶべき作品群だ。  
この2月に刊行された画文集『森の天界図像 わがアイコン 胞子紋 渡辺隆次のこ画文集』は渡辺のそんな胞子紋画をエッセイとともに紹介した美しい一冊である。

きのここと渡辺の出会いには東京から八ヶ岳山麓に移住した44年前にさかのぼるが、シモフリシメジとの邂逅を機縁に、胞子自身が描く不思議な図様に注意を向けるようになった。きのこを一晚紙上に置くと、傘裏の鬚や管口から胞子が舞い落ちふしぎな紋様をつくる――それが胞子紋だ。紙の鏡にきのこが自分の内面をさらし、映し出したような紋様に魅惑された画家は、定着液でそれらを固定し、絵筆を加えるようになる。過去の絵や版画に胞子紋を加えることもおこなわれる。こうして

営々と制作され続けることになった「胞子紋画」群を改めて俯瞰すると、本書への寄稿で飯沢耕太郎氏(きのこ文学研究家・写真評論家)が書くように、作品自体が、というより画家自身が「しだいにきのこ化し始めている」ように見えてくる。

胞子紋を渡辺は「わがアイコン」と呼ぶ。アイコンは聖画像という意味だが「絵と死を天秤にかけ」た結果、都市生活を捨て山里に住み描くことを選んだ若き日の渡辺隆次の初期の(それはそれで、すぐれた表現でもあった)絵は、外部に向かつて厚く鎧われた姿をしていた。胞子紋は寓話「北風と太陽」の太陽のように、頑なだった画家の心を照らし、あたたため、鎧をほどいたのだ。「ほどき」はもちろん、一朝一夕で成就したわけではない。山里での日々で自然と人間を観察し、きのこという目立たない、画家自身もかつては関心を向けることなかった存在の、全世界、ひいては地球におけるかけがえない役割を理解していく過程と平行して起こった。本書に掲載された「わがアイコン 胞子紋」(書き下ろし)や、過去の著作からの抜粋の数々は、そのような画家の心のドラマを伝えている。ささやかな「きのこの里」でもある砂丘館に、そんな渡辺の胞子紋画たちを迎える。

(砂丘館館長)



「月の影」2014-2019年



「星のかけら・spore print・5」2018年11月



## 『森の天界図像

わがアイコン 孢子紋  
渡辺隆次きのこ画文集』

画・文: 渡辺隆次

寄稿: 飯沢耕太郎(きのこ文学研究者・写真評論家)

宇井浩一(医師・美術コレクター)

四釜裕子(編集者・詩人)

大倉 宏(美術評論家)

企画制作: 渡辺隆次画文集刊行委員会

発行・発売: 株式会社 大日本絵画

B5版・96頁・ソフトカバー 2,420円(税込)

渡辺隆次(わたなべ りゅうじ): 1939年東京八王子に生まれる。武蔵野美術学校(現武蔵野美術大学)本科・西洋画卒業。東京学芸大学養護科修了。無所属、作品発表は主に個展。デビューは1966年、青木画廊、以降日辰画廊はじめ多数。1977年から八ヶ岳山麓(北杜市)のアトリエで制作。新潟絵屋で2006年より2017年まで4回、ほか本間美術館(山形)、砂丘館、角田山妙光寺客殿(いずれも新潟)、フィリア美術館(山梨)、八ヶ岳美術館(長野)で個展を開催。西ドイツ公立美術館巡回展(グループ展1982年)。1992年より1999年まで武蔵野美術大学特別講師。1999年～2003年武田神社(山梨県甲府市)菱和殿天井画制作。2004年～2005年同神社能楽殿鏡板絵制作。エッセイストとしての著書に『きのこの絵本』『山のごちそう』『八ヶ岳 風のスケッチ』(以上ちくま文庫)、『花づくし実づくし 菱和殿天井画』全三巻(木馬書館)、『山里に描き暮らす』(みすず書房)など。今なお精力的に制作を続ける。

ギャラリートーク  
「わがアイコン 孢子紋」  
渡辺隆次／聞き手: 大倉宏(砂丘館館長)

6/19(土) 14:00-15:30

参加費: 500円 定員: 25名

〈砂丘館へ要申込み〉

TEL・FAX (025-222-2676) または  
Eメール (sakyukan@bz03.plala.or.jp)

受付開始: 5月19日

〈同時期開催〉

渡辺隆次展

6/12(土) - 27(日) 11:00-18:00

会期中無休(最終日: 17:00)

新潟絵屋

新潟市中央区上大川前通10-1864 TEL.025-222-6888



「鼎談の壁・金」2020年



砂丘館

旧日本銀行新館及収蔵庫  
指定管理者: 新潟絵屋・新潟ビルサービス特定共同企業体

会場: 砂丘館ギャラリー(蔵)ほか各室

9:00-21:00 休館日: 月曜日

新潟市中央区西大畑町5218-1 tel.025-222-2676

E-mail sakyukan@bz03.plala.or.jp

新潟駅万代口より浜浦町線C2系統 又は 観光循環バス「西大畑坂上」下車徒歩1分

※砂丘館には駐車場がありません。また、周辺の道路は駐車禁止です。

公共交通機関をご利用ください。

※新潟市西堀地下駐車場をご利用の方は駐車券提示にて1時間分の無料券を差し上げます。

〈新型コロナウイルス感染防止のためマスクの着用をお願いします。〉

私たちは砂丘館の自主事業を応援しています。

青い丸いれ株式会社 NSGグループ ISHIKAWA 新潟ビルサービス

丸屋本店 藤田金屋 WIND 郷土の文化に親しむ会